

二宮町山西の民俗 (2)

佐川 和裕

はじめに

本報告は、平成8年度から実施している博物館実習にともなう民俗の聞き取り調査のうち、平成10年度に行った調査のまとめである。調査に至る経緯については既に詳しく述べているのでここでは触れない。また、対象とする地域の概要および話者の履歴と環境についても同書を参照願いたい。

昭和14年

<ススハライ>

12月の都合のいい日にススハライ（あるいはススハキ）を行った。大きな家ほどよく行っていたようだった。まず、家の物を全て外に出した。かつてのオウライはほとんど車が通らなかつたため、道の4分の1くらいまでは物を置いて大丈夫だった。畳は上げて運び出し、2枚ずつ立てかけて干し、家の周りを払ってから中を掃除した。天井裏は草箒で払った。ただし、いい家には天井があったが、草葺きの古い家では奥の間にしかなかった。家の中の掃除は若い人の仕事で、手拭いで鼻と口を覆って行った。

昼食にはオムスビを食べた。オムスビは三角形をしており、オニギリとは言わなかった。米1升で23個できた。お昼のあとは、戸を開けて中を掃き、女性が雑巾がけをした。家の周囲や屋内の高い所のススやクモの巣を払うにはシノタケ（オンナタケ）を2、3本束ねたものを使った。干した畳を積み重ね、長い方の両側にシノダケを両手に持った男がバタバタと埃を叩き出し、横にいる男が箒で掃き、他の者が家の中へ運び込んだ。畳の裏には東西の位置などを書きこんだ印がついていた。これが消えていると消し炭で書いておき、この印をもとに畳が敷きなおされた。最後に外に出した物を中に入れた。なお、シノタケは家の裏の土手に生えていた。

<歳の市>

12月18日に行われる飯泉の観音さん（勝福寺）の市に始まり、23日の梅沢、24日の二宮、25日の二宮元町（秦野街道）の市というように概ね東へ市が行われた。市で買った食べ物はすぐ食べるが、それ以外の物はすぐには使わない。2銭ほどもら

って買い物をしたが、2銭硬貨は作られていなかったのので1銭を2枚使っていた。50銭銀貨は別名をギザといった。まわりにギザギザがついているのは50銭だけだったのでそう呼ばれていた。

<餅つき>

12月27・28日に餅つきをする。ウスは大きな百姓の家など特定の家にしかなかった。ウスを持つ家では夜明け前、朝一番に餅を搗いた。ウスは次から次の家へと借り出され、順番が決まっていた。これは時間を省く知恵だったのでさう呼ばれていた。

分家や近所の家が、一軒の家に集まって行くこともあった。なお、29日はクンチモチといって9が苦につながるために嫌い、餅は搗かなかった。また、搗いた餅は元日になって食べるもので、歳は数え年だから餅を食べると歳をとるといって、元旦の雑煮で祝うまで食べてはいけなかった。元日の雑煮は年男が食べる数を皆に聞いて餅を焼き、子どもは歳の数だけ食べろといわれた。白い餅は元日の朝の雑煮のときだけで、他はアワやキビの入った餅をよく食べた。

<大晦日>

年が新しくなると着る者から履く物まで新しくなる喜びから、「もういくつ寝るとお正月…」と歌をうたい指折り数えて待った元日を早く迎えるために子どもたちは早く寝かされた。一般の家庭で年越しソバを食べるようになったのは戦後になってからのこと。

昭和15年

<紀元節>

昭和15年2月11日は皇紀2,600年を祝う紀元節で、国をあげての式典だった。この日を境に戦時体制が強化され、それまで何でもなく行われていたことができなくなった。すべてに節目の年となった。

<おじさんの出征>

出征の前に、夜、身内や友人が集まってお祝いをし饞別をもらった。この頃は必ず生きて帰ると信じていたので、出征に対して悲愴感はなかった。当日、おじさんと身内とともに家の前で写真を撮った。写真を撮るときのマグネシウムの「ドン」という音が大きくてとても驚いたことを覚えている。出征の際には、幟や旗を押し立て、手に手に日の丸の小旗を打ち振り、町内会、青年団、在郷軍人会、国防婦人会などの団体や、親戚、友人な

ど大勢で「ドンドン ドンガラガッカ ドンドン…」という軍楽隊調の鳴り物で、「天に代わりて不義を討つ…」「勝ってくるぞと勇ましく…」「わが大君に召されたる…」などの軍歌を次から次へとうたいながら駅まで送った。駅前でおじさんがリング箱の上に乗り、大きな声で元気よく「元気で行って参ります」と挙手の礼をすると、在郷軍人二宮分会長の「西山権八君万歳」という発声で皆が万歳三唱をした。

<経済統制令>

統制令によって物の値段が2倍になった。切符がないと物が買えなくなり、配給という形がとられた。勝手に売ってもいけないようになった。また、物が自由に売買できなくなった頃から闇取引という言葉が使われるようになったり、「金鶏輝く日本の栄えある光身に受けて…」と歌った式典歌の替え歌が流行した。「金鶏上がって15銭 光ホウヨク30銭 みんな上がって大闇だ 紀元は2,600年」。それまでゴールデンバット1箱10本入れて（金鶏）8銭、光とホウヨクは15銭だったことを風刺したもの。

<一銭五厘>

上官が兵隊をしかるときに「貴様らは一銭五厘だ」と言っていた。出征を命じるハガキが一銭五厘だったので、兵隊の命は一銭五厘という意味合いで使った言葉だという。

<入学式>

4月1日に二宮尋常高等小学校の尋常科へ入学した。入学式には、母かそれに代わる人が学校へ連れていった。女性は必ずとっていいほど着物に黒い羽織を着た。無ければ借りてでも着て行き、「先生よろしくお願ひします」と挨拶した。

<登校班>

茶屋町の東西で1班、2班に分かれていた。1班、2班は更に男女別に分かれる。男女一緒のことはなかった。登校班の集合場所では、みんなが集まるまで遊んで待っていた。登校するときには2列に並び、1年生が前で高等科の2年生が後ろになり左側通行で歩いた。家のないところでは下水の側溝に蓋がなかった。蓋のあるところでも危ないから蓋の上は歩かないようにした。

下校時は馬力、牛馬力、リヤカー、自転車の往來が頻繁だったため注意して帰った。自動車は少なかった。

<学校の服装>

金ボタンの学童服、半ズボン、ズック（運動靴）。学年、組、名前を記した名札を服に縫い付けた。名前はカタカナ書きだった。名札のところに衣文止めを使ってハンカチをつるした。これは戦後まで続いた。戦争準備のため牛皮はなく、豚皮のランドセルを背負った。ランドセルは上級生になると下級生や弟に譲った。また、ズックのキレでつくったかばんを兄弟から譲り受けていたが、1年生の3学期頃から昔に返って木綿の風呂敷が使われるようになった。教科書と帳面と筆箱を入れた風呂敷を体に結ぶと手があくので鬼ごっこをしながら帰ることもできたし、傘をさす時も便利だった。履物は下駄かワラゾウリだった。

雨の日はカッパを着て長靴をはいていたが、軍事物資優先になってからは下駄になった。冬にはどんなに冷たくても足袋が濡れないように学校へ行くときは素足で行き、教室に着いてから雑巾で足を拭いて足袋をはくようにしていた。一般の家庭では子ども用の小さい傘はなかった。

<朝礼>

朝礼は毎朝あり、月曜日と土曜日には校長訓話があった。学級ごとに二列に並んだ。国旗掲揚の際には「君が代」を高等科の2年生が5人でラッパで演奏された。ラッパの演奏はこの年が最後になった。

<先生の服装>

男の先生は詰襟や背広姿が多かった。女の先生は着物に袴が主で、若い先生は普段はスーツを着ていた。女の先生の髪型は髪を後ろでまとめる形が一般的だった。

<礼と挨拶>

礼には二種類あった。一般的な礼は頭を下げた際に手を体の側面につける形。もうひとつは、頭を下げた際に手をひざにつける形で、このようにすると自然に頭が深く下がる。この礼を最敬礼といった。

学校では「おはよう」「さよなら」の挨拶のしつけがあった。その他、授業中は指されたら元気よく返事をする事、「ハイッ」は1回といった指導があった。

<前置き言葉>

天皇陛下や皇族のお名前を話に出すときは、「かしこくも」「恐れ多くも」といった言葉を前置きに使った。この言葉が出たら直立不動で姿勢を

正し、失礼がないように聞く準備をした。

<歯磨き>

練り歯磨きはあまり使われておらず、スモカという粉歯磨きを使っていた。または指を使って塩で磨いた。学校での歯磨きの指導はなかったが、若い人たちは磨いていることが多かった。学校で虫歯の検査をしたこともあったが、虫歯を気にするという意識はほとんどなかった。

<衛生記念日>

衛生記念日というのがあり、衛生検査や服装検査をおこなった。爪の検査、名札調べ、着物は洗濯してあり清潔かどうかなどを調べた。

<ヨクマナビ ヨクアソベ>

職員室横の黒板には「ヨクマナビ ヨクアソベ」と書かれていた。入学当初は、男組同士で廊下でケンカをよくしたが、始業のサイレンが鳴るとあつという間に教室に戻った。

<帽子掛け>

廊下に釘が打ってあり、シノダケを挟んで帽子掛けが作ってあった。誰がどこに掛けるかという事は決まっていなかった。

<科目>

読み方、書き方、算術、図画、手工、唱歌、修身などがあった。算術は先生に隠れて指を使って計算した。書き方は3学期から始まり、墨だけは支給されたが、他の道具は自分で用意した。墨の摺り方から教わり、新聞紙が真っ黒になるまで練習し、1枚だけもらう半紙に清書して提出した。図画では軍艦の絵を描いたりした。修身は忠孝が規範で、読み方は「サイタ サイタ サクラガサイタ」で始まる『小学國語読本 卷一』で、家へ帰ると大きな声で読んだが、大方の者が三日坊主だった。

<石板>

黒い石の薄い板で、学校から支給された。左に名前、右に学年と組が書かれてあった。ろう石の細いもので書き、消すときは黒板拭きの小さいのがヒモで取り付けてあり、それを使った。よく割れるので、割れると自分で書店で買いなおした。

<1年生の遠足>

春の遠足は二宮を一周した。学校、中里、万年橋、中里から釜野への素掘りのトンネルを抜けて越地を通過して浜へ降りて弁当を食べて遊んだ。弁当と水筒以外に菓子を持って行ってもよかった。

<持物検査>

秋の遠足では菓子を持って行ってはいけないといわれ、泣の原のお地蔵さんだったが、途中で雨になり学校へ引き返して持ち物検査があった。菓子を持っていなければ、先生が白墨で机に○をつけた。×をつけられた者は床に座らされた。立たせるか正座させることが罰だった。ゲンコツでコツンと叱ることはあっても、平手や棒で殴ることはなかった。

<秋の運動会>

底がアメ色のゴムで白い布のタビを選手タビといって運動会にはいた。ハチマキは両面使えるようになっていた。赤、白の両面で母親が作り、名前が筆で書かれた。短くなると新しいものを作り、弟妹に転用した。種目は徒競走、部落(町内)別競争(リレー)、ダルマ運びなどがあった。徒競走は6人ずつ走る。ダルマ運びは組対抗でおこなった。その際、ハチマキで色分けをしていた。徒競走では、1、2位の旗をもらって校長先生のところへ行くと、褒美にボール紙(黒ずんでざらざらした厚紙)を短冊に切って1等賞と書かれたものをもらえた。お金では買えないものだったので、皆とても欲しがった。

<通信簿>

昭和14年度までは黒堅表紙の通信簿だったが、国民学校へ移行するのを見越して、白い厚紙を2つ折りにした単年度の物になった。右側が一学年で、左側が修了の校長印を押すようになっており、その裏が健康診断書になっていた。

<いたずら>

教室の入り口に黒板消しをはさんだりして、恐い先生を恐れずよくいたずらをしかけた。

<夏休み>

夏休みの宿題は出なかった。登校日は4、5日あった。

<弁当箱>

弁当箱は兄から順にお下がりを使った。アルマイトという白い素材で作られていて、日の丸弁当(梅干しひとつ)を続けると、何人目かには蓋に穴があいてしまった。

<医者>

病気にかかっても、よほどのことがない限り医者にはかからなかった。診立てのよくない医者をヤブ医者と呼んだ。家には富山の薬があり、粉薬だった。「馬の小便 水薬」と歌ったが、医者に

かからないと水薬はなかった。

<修了式>

優等賞、皆勤賞が授与された。講堂が無かったので、3尺ずつのアコーデオンで仕切っていた教室をぶち抜いて式を行った。式は一度では入りきれないので、4年生以下と5年生以上の2度に分けて行った。

<ワル>

悪人のことではなく、暴れ馬のように元気が良すぎる者に対して使われる呼び名だった。腕白と同義語。

昭和16年

<二宮町国民学校初等科>

昭和16年、尋常高等小学校から中郡二宮町国民学校初等科第2学年に変わった。新生が入り、面倒を見るようになって学校が楽しくなってきた。

<凱旋>

凱旋した人の手柄話を賑やかに聞いて過ごした。しかし、無言の凱旋といって白木の箱に入り、白い布で首から下げられての帰還は、出征のときの賑やかさとは反対に言いようのない寂しさがただよった。

<非国民>

出征は20才の青年の義務だった。逃げた場合は非国民と呼ばれ、中国・朝鮮などへ逃げ回ることとなった。身内も世間に顔向けできないくらい肩身の狭い思いをした。

<大日本国防婦人会>

白い割烹着に「大日本国防婦人会」と書かれたタスキを掛けたおばさん達で、出征兵士を送り、その家庭の老父母の面倒をみたり、戦死者を迎えたり、国防献金、千人針、防空訓練などで「銃後の守り」に明け暮れていた。

<青年学校>

高等科2年を卒業した後、任意で夜間に通う学校。昼間は家業を手伝うなどしている人が通ったもので、高等科の校舎を使った。このような学校が昭和16年以来増えた。

<科目の変化>

国民学校では、算術は算数に、唱歌は音楽に、手工は工作になった。

<楽譜>

2年生の3学期、音楽で音階がドレミファソラ

シドからハニホヘトイロハに変わった。

<学校の掃除>

掃除は6時間目の終了後。1、2、3年生はそのまま帰り、上級生が各教室の掃除を割り当てられ、便所掃除も行った。

<偏平足の検査>

5月頃、先生が一人ずつ雑巾の上に足を載せ、床に足を置かせて偏平足の検査をした。兵隊の行軍（移動）に偏平足は弱いため、それを調べた。

<2年生の春の遠足>

二宮から大磯まで歩いた。神揃山（カミソリヤマ）を通り、鴨立庵から浜へ出て大磯の港へ行った。浜で弁当を食べて遊んだ後、大磯駅へ行き、帰りは車で帰った。汽車賃は4銭だった。ほとんどの者が汽車に乗ることが初めてだったため、その喜び様はたいへんなものだった。上に開けた窓から外へ頭を出すのを禁じられていたが、電柱に頭が当たりそうで恐かった。なお、そのときの3年生は小田原、4年生は江ノ島、5年生は鎌倉、6年生は横浜で、往復汽車だった。

<国府祭（コウノマチ）>

6月21日。二宮町は、二宮、中里、川勾、山西、一色が明治23年に合併したもので、神輿の番が西から順にまわる。曜日を問わず行われたが国府祭へ行くと行って早退すれば、学校は欠席扱いにはされなかった。

学校から帰るとすぐに、竹（シノダケ）を持って川勾神社へ行き、幟を1枚取って仕立て、2年生ぐらいから6年生までが神輿を先導しながら駆け、ときおり幟を天へ突き上げるように「ヤーットコ サカセ」と言いながら走った。幟には「奉納二宮大明神」と大きく書かれていた。5年生までは用意されたものを使うが、6年になると筆の立つ人を書いてもらって作って奉納した。神揃山では、神輿の前に太い綱をつけ、氏が上から坂道を引き上げた。神輿が着座すると、幟の竹を西の空へ向けて投げ捨て、幟は神社へ返納した。

<国民学校手帳>

成績がつけられているもので、ゴム印で評価が押されていた。尋常小学校時代の甲乙丙丁や10点評価と変わって、優、良上、良、可の4つの評価になった。

<アイスクリーム>

2年生の夏休みに大船駅でアイスクリームを買ってもらった。小さな折り箱に入っていて、木の

匙でたべる。ザラザラしていてすぐに溶けてしまった。10銭だったが、けっこう高い物だった。

<簡単服>

この頃から着る人が増えてきた。今で言うワンピースのことで簡単服と呼んでいた。着物に比べ簡単に着られるという意味だったのだろう。

<隣組>

隣組がつくられ、「トントントンカラリンと隣組」という歌が口ずさまれるようになった。回覧板ができて、「云い伝え」は急ぐ場合だけとなった。なお、江戸時代以来の五人組はホングミと呼ばれるようになった。

<九九>

2年生の2学期に先生が替わり、若い女の先生は新しい教え方で、掛け算を先取りして予想外の授業となり、1日を当てられた。

<頭さわり>

二手に分かれて、頭をさわったら勝ちという遊び。不意に後ろから攻めても、この遊びだけは卑怯とは言われなかった。校庭全土を使い、3人で組むと「日独伊三国同盟」といった。

<大東亜戦争>

12月8日に開戦。毎日ラジオで大本営発表の戦況をながしていた。男の子は戦争ごっこをやっていたので、ムズムズするような感じだった。「カッタ（勝った）カッタの下駄の音」などとはやしたてた。

昭和17年

<シンガポール陥落>

紀元節を目指して占領しようとしていたシンガポールが陥落すると、陥落を祝して全校生徒で旗行列を行った。大太鼓、小太鼓を打ち鳴らして、班別・男女別で手に手に日の丸の小旗を持ち、高等科が先頭で1年生が後尾につき、全町を方面別にまわった。なお、それ以前のお祝いの時は提灯行列をしていた。提灯行列は昭和12年の南京陥落が最後だった。

<試験>

3学期の放課後、われわれ2組の熊本先生は、選考した生徒だけを残して国語と算数の試験をさせ、優等賞を決められた。国民学校となって優等賞は練成賞と変わったが、皆、優等賞優等生といていた。

<食事>

ご飯は黙って食べるのが鉄則だった。家族の中でそれぞれ箸の大きさが異なっていた。

<メザマシ>

朝起きて食べる菓子をメザマシといった。寝る前にも「これを食べたら寝ろ」と言われて菓子を食べた。

<台所>

勝手。板の間で、土間に流しがついていた。古い家では板の間で膝をついて使う流しだった。

<校歌>

11月3日の開校記念日には「うれし うれし 今日の記念日 我が小学の建ち初めし良き日は とも巡り来ぬ……」と校歌を歌った。戦争で次第に歌われなくなり、戦後は新しく校歌が作られた。先生が転任される時は、朝礼で「師を送る歌」を全校生徒で歌って先生を送った。

<先生の呼び方>

小学校の先生を訓導と呼び、中学の先生を教諭と呼んでいた。他に先生という呼び方はお医者さんだけだった。

まとめにかえて

既に報告した聞き取り内容は、子どもの頃の遊びや動植物の名前などを中心としたもので、年代的には昭和12年から小学校に入学した昭和15年までの内容であった。今回の聞き取りは、前回は補足する形で、昭和14年の年末から昭和17年の年末までの学校生活を中心とした内容となっている。いずれも詳細な部分まで記憶されていることに対して大きな驚きであるとともに、記憶が季節感をもって語られることの特徴は前回の報告においても指摘した通りである。しかし、前回の報告と違い、記述方法は年代を順に追っている。これは、話者の記憶は1年の流れの中で展開されているということであり、その点を尊重しながらまとめることにしたためである。したがって、学校生活や年中行事、あるいは歴史的な事象を別々にまとめることをせずに年代ごとに記述した。いくぶん随想的であり、記述方法の是非もあろうが、本事例のように1人の話者から継続的に聞き取りを進めていく中では、話者に合致したスタイルを見つけて行くことも必要ではないかと考えている。

なお、話者の西山敏夫氏には継続的にたいへんお世話になっている。本報告においても内容を監

修していただいた。この場を借りてお礼申し上げます。
(当館学芸員)

【註】

- (1) 平成10年度は、博物館実習を平成10年12月1日～12日に行った(本誌年報11頁参照)。今回の調査に参加した実習生は下記の2名である。報告は実習生から提出された調査表および筆者自身の調査表をまとめたものである。
- ・栢沼奈佳(東海大学文学部文明学科4年)
 - ・平田直史(桜美林大学経済学部経済学科3年)
- (2) 拙稿「二宮町山西の民俗(1)」『年報—平成8年度—』1997 大磯町郷土資料館
- (3) 旧東海道(現国道1号線)。

- (4) 歌の正式な題名ではない。先生の退職や転任時に歌ったもので、教科書等には載っていなかった。

以下に歌詞を記しておく。

- ①学びの庭の父母と
仰ぎまつりし師の庭の君に
別るる今日の悲しさよ
思えばさめぬ夢に似て
- ②別れて後も御教えは
かたく守りて励ままし
千々の恵みの一つだに
報ゆる道となるまでに

年 報

— 平成10年度 —

◇平成11年12月28日発行

◇編集発行

大磯町郷土資料館

神奈川県中郡大磯町西小磯446-1

TEL 0463-61-4700

◇印刷

(株)カメイ写真